
black snow

畔

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

black snow

【Nコード】

N2816Z

【作者名】

畔

【あらすじ】

何度目かの高度経済成長期が過ぎ、地球は再び汚染された。

12月。大気に舞う塵によって黒い雪が降る。酸性雨、磁気異常、終末の世界。

劣悪な環境の中、世界が滅びると言われている中で一掃屋のナイン・ペンジャスは淡々と業務をこなす。

そんなある日、彼の運命を変える依頼が舞い込んでくる――。

t h e o p e n i n g

雪が黒い。

窓から覗く景色は雨が降る予兆とでもいつかのよう白んでいた。ナインはそこに黒い斑点を見つける。声を出す間もなく、白のキャンパスに墨汁を落としたような黒い斑点が急速に増えた。斑点は宙を漂い、やがて地面へと消える。

黒い雪。

緑を取り戻したと思われた地球は何度目かの高度経済成長期を迎え、再び汚染された。

光の届かない街、便利を求めすぎた代償。

黒い雪はそれを顕著に示している。

ブルルルルル。ブルルルルル。

味気のない音が空気を震わせる。ナインは受話器を取った。

「もしもし。……はい、そうですが。——ご用件は？」

壁掛け時計に目をやる。アナログ式の、幾分か時間がズレている時計。便利さの代わりに与えられた談笑の一つ、磁気異常。

「……申し訳ありませんが、当店はそのようなことを取り扱っておりません」

住宅街からやや離れた場所に建っている、こじんまりとした店。看板すらかかっていないが、それでも都市部から客は来る。

客の言葉を聞いたナインは形の良い眉を顰めた。舌打ちをしたい

気分だ。

「……分かりました。明日の三時ですね」

ナインは表に出る。そこでは一頭の飛竜が寝そべっていた。彼が近付くと、飛竜は眠たげに瞼を開けナインを見やった。

「今日は少し遠くまで飛ぶぞ、ドラ」

愛竜の頭を撫でてやり、その背中に飛び乗る。飛竜——ドラ——

——は翼を広げ、ゆっくり上昇した。

「ねえジオ、『一掃屋^{いっそうや}』なんて本当にいるの？」

ベラ・キャロルは厳つい面立ちをした男に尋ねた。父親譲りの褐色の肌に映える深紅の瞳が不安げに揺れる。

一掃屋は簡単に言うのなら、何でも屋のことだ。田舎のことなど気にもかけていない政府の軍に代わってならず者を一掃してくれるから、そのような名がついたのだと言われている。主な依頼が、はびこる悪を成敗してほしいというものであるというのも由来の一つだが。

彼女の父親——ジオ・キャロル——は、途中で通話を切られた携帯のディスプレイに視線を落とした。待ち合わせの場所に到着したら電話を入れると言われてからもう三十分が経過していた。

その時だ。上空から帽子を目深に被った青年がやってきた。

「お待たせしました。荷物を預かりに来ました」

ベラは彼が意外にも細身だったこと——ベラは自分の父親のように武骨な男が『一掃屋』をしているかと思ったのだ——、若

かったことに驚いた。自分とあまり歳が変わらないように見える。

青年——ナイン——は言葉を続けた。

「尚、お預かりした荷物が破損しようと紛失しようと当店は一切責任を負いませんのでご了承ください」

それにはジオが反応する。

「そんなの聞いてねえぞ!!」

するとナインは鋭い眼光をジオに向けた。

「俺の仕事は預かった物を綺麗にすることだ。業務外のことに責任は持てないね」

「チツ……!　しょうがねえな。御雨以上に腕の立つ一般人はいねえんだ」

「『荷物』は?」

「あの家の中だ」

ジオは北西に位置する色あせた小屋を指した。ナインは頷き、「数は?」

「十五だ」

「なるほど。それじゃあ料金の話だが——」

ナインは金額を伝えた。ジオの顔色が急速に蒼くなっていくのが分かった。話を飲み込んだ頃には、鬼のように憤怒していた。

「バカヤロウ!　そんなに払えるか!!」

「なら、交渉決裂だな」

ナインは肩を竦めた。飛竜に乗ろうとしたその時、携帯が鳴る。

ナインはジオに背を向け、通話ボタンを押した。

「大変長らくお待たせしました、『ペンジャス・クリーニング屋』です。……本日ですか?　それなら——」

「待て!　ちゃんと金を払う、だから俺の依頼を聞いてくれ!!」
慌てて押しとどめるジオをナインは一瞥した。

「——それなら、五時以降ということになりますが。……毎度ありがとうございます。では、五時に。○ビルですね。承知しました」

ピツと通話が切れる音が静寂の中に響く。

「それで、俺はどうすればいい？」

「『荷物』を綺麗さっぱり片づけてくれ。ただし、清掃しすぎるなよ？」

「それには別料金が加算されるが」

「構わない。背に腹は代えられないからな」

「分かった」

ナインは一度飛竜のところへ戻ると、銀に鈍く輝く銃一丁と何本もの剣を取りだした。短剣、長剣、長さは様々である。

「スゲエ数だな」ジオは感嘆する。

「趣味で集めているだけだ」

「さすが一掃屋ってところか」

それを聞いたナインは露骨に嫌そうな顔をしたが、ジオはそれに気付いていなかった。

「あんた、この界限じゃ『一掃屋』の名で結構有名なんだぜ」

『荷物』を一掃しようと室内に繋がる唯一のドアを開けるために取っ手に伸ばされた手が止まる。

ナインは冷めた目でジオを見据えた。

「俺の仕事は物を綺麗にすることだ。一掃屋なんかじゃない」

クリーニング

t h i e f

黄ばんだ空気が漂う中。

男は琥珀色をした液体が入ったグラスを手にする。すでにぬるくなつてしまったそれは、余計に喉を乾かせた。男は手元の麻雀牌を睨む。どれほど眺めても牌が変わることはないのだが、それでも勝負に勝ちたいという執念が男の潔さを削いでいる。

男は目の前の若者に目をやった。金髪青眼の、眼光の鋭い若者。恐らく歳は男の半分もないだろう。

若者は男の視線に気づき、早くしろと勝負の続きを促した。全くブレのない表情、きつと勝負はついている。だが、そんな若造に自分が負けそうになっているなど、彼は信じたくなかった。

「なあ……もう止めにしないか？」

若者は呆れたように言った。

「いや……まだだ！ まだいける！」

「そうだそうだ!!」

同じく麻雀に参加していた、どこまでも残念な面々は男に加勢する。

ナインは苛立ちを隠そうともせず、短く舌打ちした。

「分かった。それならさっきの賭けをナシにしてやる。あんたはただ、そのコートに忍ばせているものを素直に渡せばいいんだ」

男はぎくりとしてポケットの中にあるものに触れる。——どうして見破られた？

「あんた、それでバレてないとも思ってたのか？ 誰が見ても拳動不審だったぞ」

「クソっ……！ こうなりや強行突破だ！！ 行くぜ、野郎共！

」

「うおおおお!!」

拳銃や刀を片手に向かって来る連中を、ナインは最小限の動きで

かわしていく。

適当に選んだ武器に手を伸ばしてみると、それは小型ナイフだった。まずまずの得物だ。

ナインはざっと周囲を見渡した。ジオの言った通り、『荷物』の数はきつちり十五だ。

十五人。彼らが依頼品を盗んだ犯人たち。

「只今をもちまして、依頼品の回収を行います。身の安全は保証しかねますので、せいぜい気をつけることだな」

その言葉と共に、ナインは男のコートを切り裂いた。

中から出てきたのは、光が入る角度によって色が変わる、直径五センチほどの宝石だ。魔石と呼ばれるそれは、古代の魔導師たちが自然エネルギーを凝縮し封印を施した石である。魔石が一つあるだけで街一つ分の自然が戻ると噂されている。だが、魔石は世界にほんの少ししかなく、そのほとんどを政府が管理しているのだ。そして政府は魔石を使って新兵器を作ろうと企んでいるらしい。

「噂には聞いていたが、初めて見たな」

ナインは魔石を手にとった。

貴重な品をなぜジオが持っていたのかは知らないが、ナインは知ろうとも思わなかった。

俺の仕事は他人を詮索することじゃない。

男は魔石を奪い返そうとしたが、ナインが長剣を手にし、切っ先を自分に向けてきたので抵抗を止めた。

「依頼品の回収を完了致しました」

冷やかな声と共に、ナインは小屋を後にした――。

「取り返してやったぞ」

無造作に放り投げられた魔石をジオは慌ててキャッチする。

「危ねえな、オイ！」

「依頼された仕事は終わらせた。あとは知ったこっちゃない」

「チツ、無愛想な奴だぜ」

「それより、報酬はちゃんと払ってくれるんだろうな？」

「ああ。——ほら、持っていけ」

ジオは平べったくて長い鉄の塊をナインに寄越した。よく見ると、それは手入れのされていない剣だった。

「数少ない対磁気性の剣だ。世界の巨匠が作った幻の一品だぜ。俺がそいつから貰ったんだ、大切にしろよ」

ジオは自慢するかのように言う。ナインは訝しげに眉を顰めた。

「これじゃ使い物にならないんじゃないか？」

すると、ジオは勝ち誇ったように言った。「この剣はな、切れ味なんかどうでもいいんだ。これは獲物を叩き潰すための剣なのさ」

「……あんた、いったい何者なんだ？」

「俺はただの一般市民だぜ」

「魔石といい、この剣といい……。とてもじゃないが、ただ者には見えないな」

「他人には干渉しないんじゃないのか？」

「疑問に思ったただけだ。たとえあんたがお偉い様だったとしても、俺には関係ないが。——それでは、またのご利用お待ちしております」

ナインは柱に繋いでいた縄を外した。自由に身動きが取れるようになった飛竜は気持ち良さそうに翼を伸ばす。

「待つて！……頼みたいことがあるの」

帰ろうとしたナインを引き留めたのは、ジオの娘のベラだった――。

t e a m

「頼み事？ まあ構わないが……。ただ、料金が発生するってことは忘れるなよ？」

「もちろん。……引き受けてくれる？」

ナインは頷いた。

「お引き受けしましょう。それで、依頼は何だ？」

「おい、ベラ」ジオはベラを呼び戻した。

「ちよつと待っててね」ベラはジオの元へ行く。

「いいのか、あんな奴に俺たちの計画をバラしちまって。報酬さえあれば何でもするような奴だぞ？ あんな血も涙もなさそうな奴を、俺は信用できねえ。もしかしたら政府に俺たちのことを差し出すかもしれない」

「馬鹿ね、ジオ。誰のおかげで魔石を取り戻せたと思っているの？ 他の誰でもない、あの人じゃない。私たちには優秀な仲間が必要なのよ。彼ならきつと、協力してくれると思うわ」

「だが……」

「ね？ ナイン。協力してくれるよね？」

ベラは振り返って言葉をかける。話の内容を知らないナインは訳が分からないまま「ああ。……？」と答えた。なぜそんなことを言われたのか分らないが、彼は報酬さえ貰えれば、その他諸々のことなどどうでもいいことなのだ。

「あなたも」

透き通った声。

よく晴れた日。逆光のせいで、その女性の顔はよく見えなかった。だが、彼女が微笑んでいたことだけは憶えている。

綺麗な黒髪。手を伸ばせば届きそうな位置で切り揃えられている。

「あなたもいつか——」

彼女の声は徐々に小さくなっていく。結局は聞き取れずに終わる。この続きを思い出そうと思ったことはあるが、ナインにはどうしても思い出すことができなかった。

ただ一つ憶えているのは、彼女がかけがえのない存在だったということだけ——。

「ナイン？ 大丈夫？」

ベラは覗き込むようにしてナインを見やる。

「あ……。悪い、話を続けてくれ」

そうだ。俺は今、街外れの村にいるんだった……。

ここはあの場所じゃない。あの人は、もう……。

「——ということだ。これから街に乗り込むぜ」

「街？ 一体何のために」

するとジオは訝しげな顔をナインに向けた。

「お前、話聞いてなかったのかよ。いいか、よく聞け。俺たちはな、魔石に頼り過ぎていたんだ。自然を犠牲にしても敵国を倒そう、新兵器を作ろうと躍起になっている。魔石で自然を取り戻せばいいと思っていやがる。けどな、それじゃ駄目なんだ。魔石だって数に限りがある。たとえ今自然を取り戻したって、きっと俺たちは同じことを繰り返すぜ。そうなら今度こそ終わりだ」

「要領を得ないな。もっと分かりやすく言ってくれ」

「つまり、私たちが努力しなければ緑は失われ続けるということなのよ。魔石のほとんどを政府が管理している。私たちは魔石を何

としても政府の手から取り戻したいの。政府の本拠地は街の中央にあるから、まずは街に侵入するってわけ。一般市民は街に入れないしね」

街に住居を持てるのは軍人が政治家のどちらかである。

ナインは冷笑した。

「そういう話ならお断りだ」

「何だと?!」

今にも胸蔵を掴みにかかってきそうなジオを何とかベラが止めた。ナインはフツと鼻で笑った。

「たかがそんなことで、政府に目をつけられたくないんでね」

「『そんなこと』だと?! 自然がどうなってもいいって言うのか!」

「俺には関係ないことだ。大体、今の時代自然がどうのこうの言えるか? 俺たちが何もしなくても、いずれこの星は崩壊する。今こうしている間に終焉が訪れるかもしれないし、もしかしたら俺たちが死んだ後かもしれない。今すぐどうこうして何とかなる問題じゃないんだ。いちいちそんなことに首を突っ込んでいたら身が持たないね」

「ナイン、私のこと憶えてない?」

唐突にベラが言った。ナインは即答する。「ああ。あんたのことなんか知らない」

「ほら、昔はよく高台にある公園で一緒に遊んでたじゃない」

「高台……。憶えてないな」

「そう……。ごめん、人違いだったかも」

ベラは俯き加減に言った。

「協力、してくれるんだよね……?」

「俺は——」

「——分かった、協力する」

「やったあ！ じゃあ行こうよっ、早く早くっ！」

満面の笑顔を浮かべるベラ。ナインはため息をついて彼女の後に
ついて行った——。

team part 2

「これは？」

ナインは影を落としてくる巨大な物体を見上げ、どちらに言うわけでもなく尋ねた。

「俺たちの飛行船だ。……つと、『仲間』には教えなきゃいけないよな」

ジオはにやりと不敵に笑う。ジオとベラは互いに目配せし、ベラが話の続きを言った。

「私たち、空賊なの」

「クウゾク？」

『昨夜未明、軍人のマイク・キーパーさん（32）が空賊の襲撃に遭い、軽傷。政府は空路の警備をよりいっそう強化するようです。皆様も夜間の外出は極力控えるようにしましょう』

今朝、こんなニュースが流れていたような……。

「もしかして、今世間を騒がせているという空賊のことか？」

「それしかないだろ。ってなわけで、これからよろしくな」

空賊……。ナインは避けられないだろう戦いを連想する。警備が強化された今、戦い無くして街に入することは容易ではない。

ナインはがくりと肩を落とした。

「ナイン?!」

「俺には無理だ。なぜなら……」

「なぜなら……?」

「俺は……面倒くさいほど条件が限定されている乗り物酔いだからだ」

「なんだそりゃ?!」

ジオは驚きのあまり目を丸くした。まず、冷徹無比な彼が乗り物酔いだということを信じられなかったし、条件つきというのも変な話だと思った。

「その条件って一体どういうものの?」

「一つ目は、高いところを移動することだ。自分の足で移動する、スピードが速い乗り物、逆に遅過ぎる乗り物なら平気だが、スピードが変わる(変わっているように思える)ゴンドラみたいなものに乗ってる状態だとアウトだな」

「おい、なら飛竜はどうなるんだよ。お前普通に乗ってただろうが」

「飛竜はいいんだ、生き物だから」

「なんだそりゃ」ジオは呆れたように言った。

「二つ目は、微妙な速度。時速40キロまでならまだいい。80キロ以上でも全然OKだ。だが、60キロとかは止めてくれ。逆に気分が悪くなる。後は……そうだな、船が無理だ。あまり乗ったことがないから分からないが、多分10分もたたずに酔うと思う。こればかりは条件のつけようがないな」

「よくそんなんで一掃屋ができたな……」

「言っただろ? 俺は一掃屋じゃないって。ただのクリーニング屋だ」ナインは肩を竦める。

「まあ、とにかくしっかりしてくれよ。お前が欠けると困るんだ」ナインはその言葉に反応した。

「おい待て。まさか俺一人で何とかしろって言うわけじゃないよ

な？」

「ごまんといる政府軍を一人で何とかできるわけもない。そう言う
と、ジオは深く頷いた。

「俺の仲間を侮つてもらっちゃ困る。お前らっ、とつと出てき
やがれ！！」

すると、それを合図にジオの周りに人だかりができた。

「舵取りを呼び寄せるなんて、一体何の騒ぎ（パーティー）なん
だ？ 船長さんよお」

無造作に頭にバンダナを巻いた、左の頬に切り傷の痕がある男が
欠伸をしながらやって来た。ヘイルと名乗ったその男は、酒瓶を片
手に「新入り、一緒にどうだ？」とナインに話しかけたが、ナイン
はそれを断った。

「あら、結構イイ男を連れて来たじゃない」

キャビンから出てきた美女はナインを上から下まで眺めると、ね
っとりとした口調で言った。

「私、レベッカっていうの。今夜一緒に……どう？」

レベッカはナインに詰め寄る。

「下らない冗談は止してくれ」

冷笑することなく、ナインは淡々と言った。レベッカは意味あ
りげな笑みを浮かべる。

「フフツ。そうね。坊やをいたぶるのは、また今度にしておくわ。
その時が楽しみよ」

そう言い残し、レベッカは姿を消す。

「悪いな、あいつはいつもあんな感じなんだ。元はいい奴だから、
勘弁してやってくれ」

申し訳なさそうにヘイルが言った。

「あんたが謝る必要はないだろう」

「ま、それもそうだな」

はははっ、とヘイルが笑う。こいつとは仲良くなれそうだ、とナ
インは思った。

その時、再びキャビンから人影が現れる。出てきたのはレベッカではなく、日に焼けた、健康そうな青年だった。歳はナインと同じか、年上かぐらいである。

「あんたが新入りだな？　俺はニックって言うんだ。よろしくな、レディ」

そう言い終えるなり、ニックはさっとナインの手を取って口づけする。

「なっ……！　俺は男だ！！」

ナインは憤慨した。彼の幼さが残る中性的な顔立ちに目を奪われた男は少くない。もちろん、一人残らず成敗してやったが。

「ありや、男？　俺は女の子かと思ったぜ。なんだ、そうか！　それじゃ改めて、よろしくな！　友達！！」

「友達？！」

ナインは思わず大きな声で言った。友達になった覚えなど、まるでない。そもそも今出会ったばかりだというのに。

だがニックはそんなことお構いなしとでも言うかのように「出会った奴らはみんな友達！　そうだろ？」と笑いかける。

めでたい奴だ……。

ナインはそう思わずにいらなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2816z/>

black snow

2012年1月8日11時50分発行